

平成 2009 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18720115

研究課題名 (和文) 言語知識のパラメータ：日本語と韓国語の統語構造の比較から

研究課題名 (英文) Parameters of the Knowledge of Language: Through comparison of Syntactic Structures of Japanese and Korean

研究代表者

原田なをみ (NAOMI HARADA)

立教女学院短期大学・英語科・専任講師

研究者番号：10374109

研究成果の概要：本研究は類型論的に近い二つの言語（日本語・韓国語）の統語構造を、とりわけこの二つの言語の代表的な統語上の特徴である**格**と**自由語順現象**の比較対照を通して、比較することにより、母国語話者の言語知識の理論の中核をなす、自然言語の規則性をつかさどる原理を規制するパラメータとは何かを考察し、「**原理とパラメータの理論**」に貢献した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	360,000	3,260,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：言語学・日本語・比較統語論・言語知識・パラメータ

1. 研究開始当初の背景

(1) 人間の第一言語の獲得過程において、子どもが生後接する言語刺激（入力）が質・量ともに不均一であるにも関わらず、同一言語圏の子どもは容易かつ比較的短期間に複雑な体系である母国語（出力）を獲得することができる。第一言語獲得における**入出力の不均衡**を説明し、かつ自然言語の多様性を説明するために提案されたのが、「**原理とパラメータの理論**」である。この理論において、

第一言語獲得における入出力の不均衡は、自然言語共通の原理と、自然言語の多様性をとらえるためのパラメータを仮定することによって、以下のように説明される。子ども（第一言語獲得者）は、生まれながらに普遍的な原理が組み込まれた言語知識を持っているが、言語刺激に接する前には、この原理に附随するパラメータの値は定まっていない。ある特定言語環境で育ちながら、言語資料に接

することによって、パラメータの値は初めて刺激として接した個別言語の値に定まっていく。

(2) 既存の理論で提案されているパラメータは、(i) 類型論的に大きく異なる言語間の差異に関わるもの（マクロパラメータ；例えば基本語順が動詞-目的語か目的語-動詞かを規定する主要部パラメータ）(ii) 語源が比較的近い言語や同一言語の方言の差異に関わるもの（マイクロパラメータ；例えばアイスランド語と英語で、目的語-動詞という語順を許すか否かのパラメータ）の二つに区分することができる。マクロパラメータの研究は、語類の違う言語の構造と、語類間の違いを分ける要因考察する上で重要であるが、個別言語の詳細な特徴の把握およびその獲得過程の理解には、それに加えてマイクロパラメータを考察していくことが不可欠である。

2. 研究の目的

本研究では、計画年度内に、類型論的に近い日本語と韓国語の文構造を、とりわけこの二つの言語の代表的な統語上の特徴である格と自由語順現象の比較対照を通して、第一言語獲得の入出力の不均衡の背後にあると仮定されるパラメータを考察し「原理とパラメータの理論」に貢献する。

3. 研究の方法

(1) 本研究の目的は、類型論的に近い二つの言語を比較し、普遍文法理論の原理を規制するマイクロパラメータを明らかにすることにある。具体的には、下記①および②の現象に焦点をあて、言語間の差異の元となるパラメータの値が規定するのは、母国語獲得者である子どもにとって比較的アクセスが容易であり、数も限られている機能範疇（助詞・接辞など）の特性である、という機能範疇パ

ラメータ化仮説 (Fukui 1988) を検証し、この仮説が日本語と韓国語の下記2点の現象における差異においてはどのように具現化しているかを考察する。

①格交替現象 日本語では「タロウがハナコを頭をなぐった」「ジロウがミツコに東京に荷物を送った」（両文とも非文）など、ガ格以外の格がついた名詞句が、単文中に複数回出することは許されない。一方、韓国語では、上述の文のような、ガ格以外の格のついた名詞句が複数回出現する単文が、ある一定の条件の元にはあるが可能となる。

②自由語順化現象・線條化 言語知識内の文の構造の組み立てに関わる部門（統語計算部門）においては、辞書から取り出してきた単語が、統語規則に基づいて組み合わせられることによって、三次元の階層構造が構築されていく。構築された構造からは、発音および意味解釈のために関連情報が (i) 調音・知覚システムおよび (ii) 概念・意図システムへと送られていくが、調音・知覚システムは、扱う情報（音声情報）の性質上、三次元の情報をもそのままの形では読み込めないため、統語部門から調音・知覚システムへの必要な情報の写像の差異には、三次元の階層構造の情報を一次元に変換する必要が生じる。この変換過程を線條化という。線條化の段階で、語の入れ替えが生じ得るが、その際の語順に対する制約は、日本語と韓国語において差異が見られる。例えば、日本語では「ハナコが 私は ジロウに会ったことを 知っている」という文で、「ハナコ」を「会った」の主語として解釈することはできないが、韓国語では可能である (Ko 2005)。

(2) 申請者はこれまで格交替および線條化を全て統語から調音・知覚システムへの写像後の現象として扱ってきたが、交付年度内に

①・②)における日本語と韓国語の違いを心的辞書および統語(文構造が調音・知覚システムに送出される前の段階)にて再考し、その違いをどの機能範疇に帰結させるかを検討していった。

4. 研究成果

(1) 平成18年度には、上記目標と課題に従い、動詞句および項構造に関する現象を検討した。その結果、(i) 二重目的語構文(ii) 受益者構文(iii) 結果構文の三現象に焦点を当てることによって決定した。この三現象に関して、韓国語の母国語話者から言語データを収集した。また、この三現象に関して造詣の深い言語学者二名(張超博士(中華人民共和国・上海海事大学)およびリチャード・ラーソン教授(米国・ストーニーブルック大学))と討議の機会を設け、データの分析、および理論的意義の考察を行った。その結果日本語と韓国語の二重他動詞構文の違いは与格(日本語の音形は「ニ」)のどの自然言語にも共通の普遍的な特性と、日本語固有の「二重ヲ格制約(Double-o Constraint)の相互作用によるということが明らかになった。

(2) 平成19年度には、動詞句および項構造に関する現象を、二重目的語構文に焦点を当てて検討した。当該現象に関して韓国語の母国語話者から言語データを収集し、比較・考察のためにバスク語・中国語のデータに関する文献も行った。この現象に関して、二名の研究協力者と討議し、データの分析、および理論的意義の考察を行った。その結果、日本語と韓国語の二重他動詞構文の違いは、与格(日本語の音形は「ニ」)のどの自然言語にも共通の普遍的な特性と、日本語固有の、ニ格の格認可システムにおける与格の特異性(不完全な格)により導き出されることを

示した。

(3) 平成20年度は、上記目標と課題に従い、(I)ニ格付与(II)ガノ交替について、格交替と線状化についての考察をまとめた。

(I)に関しては、日本語の与格(ニ格)は主格(ガ格)や対格(ヲ格)と異なり、名詞の格素性を認可する能力が欠如しているという仮説を提唱し、研究協力者のリチャード・ラーソン教授(ストーニーブルック大学)の協力の下、日本語の二重目的語構文も英語およびその他世界の諸言語同様、動作の対象となる名詞句が動作の着点を表す名詞句よりも文構造で高い位置に生成されるという分析を提示し、国際学会で発表をした。

(II)に関しては、日本語固有の「主節の文焦点にガ格を付与する」という規則に基づき文の主要部の動詞性が弱まる連体形が出てくる環境(関係節および名詞の補文)においては焦点の素性を持たない名詞句は左端から循環的に属格(ノ格)が認可され得ることを示した

上記の研究発表の知見の下、類型論的に近い言語間の差異を規定するパラメータは、格付与に関しては与格の格認可能能力にあり、主格と属格の交替に関しては焦点の標識のメカニズムの相違にあることを解明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

1. Naomi Harada, On the Position of Quirky-Case-Marked Argument in Japanese, 立教女学院短期大学紀要第40号, 19-27. 2009. 査読無.

2. Naomi Harada and Richard Larson, Datives in Japanese, The Proceedings of the 5th Workshop on Altaic Formal Linguistics, MIT Working Papers in

Linguistics 58, 3-17. 2008. 査読有.

3. Naomi Harada, Non-Case Theoretic Aspects of Nominative-Genitive Conversion, The Proceedings of the Formal Approaches in Japanese Linguistics 4, MIT Working Papers in Linguistics 55, 73-84. 2007. 査読有.

4. Naomi Harada, Case marker drop beyond structure, Snippets, Vol.14, 2007, 1-2. 査読有.

[学会発表] (計 12 件)

1. 原田なをみ, ガノ交替と焦点, 日本言語学会第137大会, 2008年11月28日, 金沢大学.

2. Richard Larson and Naomi Harada, Datives in Japanese and Beyond, Stony University Wednesday Linguistics Colloquium Series, 2008年9月17日, ストローニーブルック大学 (米国) .

3. Naomi Harada, Ditransitive Sentences - Derived or Not?, The Past Meets the Present: A Dialogue Between Historical Linguistics and Theoretical Linguistics, 2008年7月16日, 台湾中央研究院 (台湾) .

4. Richard Larson and Naomi Harada, Datives in Japanese, The 5th Workshop on Altaic Formal Linguistics, 2008年 5月24日, ロンドン大学 (英国) .

5. Naomi Harada, Syntactic Methods: A Brief Sketch. Cognitive Communication Workshop 2007, 2007年9月23日, 岐阜県養老町.

6. Naomi Harada, Ditransitive Sentences : A View from the East, 中日理論言語学 研究国際フォーラム, 2007年9月2日北京大

学.

7. Naomi Harada, Order and Constituency, Evolution and Syntax, 2007年8月20日, 国立情報研究所.

8. Richard Larson and Naomi Harada, On Datives in Japanese, Mayfest 2007, 2007年5月11日, メリーランド大学 (米国) .

9. Naomi Harada, Two-goal datives - A year after, 京都大学 COE プロジェクト グループ 36 roundtable, 2006年12月15日, 京都大学.

10. 原田なをみ, The Structures of VP and Benefactive Sentences in Japanese, 立命館大学国際言語文化研究所・言語科学と英語教育研究会第セミナー, 2006年11月25日, 立命館大学.

11. 原田なをみ, Frozen Scope in Japanese and its Implications, 東京大学文学部英語学研究会, 2006年9月4日, 東京大学.

12. 原田なをみ, DOC in Japanese: Derived or Not?, Center of Brain and Language Seminar 2006, 2006年8月9日, 広島大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田なをみ (HARADA NAOMI)
立教女学院短期大学・英語科・専任講師
研究者番号: 10374109

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

Richard Larson (LARSON RICHARD)
米国ストローニーブルック大学・大学院
言語学科・教授
研究者番号: 無

張超 (ZHANG CHAO)
中華人民共和国上海海事大学・外国語
学院日語系・講師
研究者番号: 無